

農業普及員能力向上に及ぼす本邦研修の効果

本シリーズでは2014年12月にJICA筑波研修業務の一環として実施した、野菜栽培技術関連コースのネパールの帰国研修員の活動視察の結果を報告している。第3報では、本邦研修が農業普及員としての能力の向上に寄与した事例について紹介する。

今回の視察では、帰国研修員のみならず、農家及び現地スタッフに「一般の普及員と本邦研修経験者を比べて、農業普及者として違いはあるか」というインタビューを実施した。その結果、「知識・技術が豊富」という回答のほかに、「教え方が丁寧」「真摯な姿勢で接してくれる」との回答を得た。この点について、帰国研修員に意見を求めたところ「以前の自分は農家に行くのが怖かった。今は余裕を持って農家に接することができる。そのためにそういった印象を持ってもらっているのではないか」との答えが返ってきた。

本邦研修において最も有意義だった経験として、8割の研修員が挙げたのは「多品目の野菜栽培の経験」であった。彼らの多くは大学・大学院を修めたのち、すぐに現職に就き、農業普及員としての業務をしてきている。しかしながら大学での実習以外、十分な栽培経験を積まずに栽培指導をしなければならず、圃場で農家に質問されるのが「怖かった」とのことである。今では少なくとも自分の栽培経験を話すことはできるし、回答に困ったときは本邦研修で見た事例や日本人インストラクターのことを思い出しながら、農家に接しているとのことである。

ある帰国研修員は「今の時代、ネパールでもインターネットや書籍を通じて、知識や情報は手に入る。しかし栽培経験は実践・実習を通じてしか身に付けることができない。本邦研修の栽培経験であるからこそ、いま自分は栽培指導をできているのだと思う」とコメントしている。

また半数の帰国研修員が、「本邦研修で習得した『論理的な思考』が自身の業務に役立っている」と回答している。たとえば試験場から試験結果が提示されても、その結果を論理的に分析することができ、研究員ともディスカッションできるようになったとのことである。また帰国研修員の中には管理職になっているものもいるが、多くの業務を総括し、管理するうえで、『論理的思考』は非常に有意義であるとのことである。加えて、現場では現地スタッフや農家に対し、栽培技術を指導する際も、「なぜこうしなければならないか」「どうしてこういった管理作業が必要か」「どこに問題があるのか」を知識と経験をベースに論理的に説明できるようになったとのことであった。現場スタッフや農家からも「こうしなければならぬ」と一方的に指導する普及員が多い中、本邦研修を経た普及員の説明はわかりやすく、勉強になるとのことであった。帰国研修員自身も「以前の自分は農家に説明してもわからないと決めつけていた。今は農家にもわかるように説明できていると思う」とコメントしている。また「以前より、自分が農家や現地スタッフから頼りにされているということを実感できているのがうれしい」と感じている。

普及員として、農家の要望に真摯に向かい合うのは最も重要なことであるが、経験の浅い、若い普及員は自信がなく、それ故に農家に対して余裕を持って接することができないということは理解できる。

本邦研修では、栽培実習は常に講義とリンクさせており、理論的に栽培技術を身に付けられるように配慮している。また試験結果を理論的に分析し、論理的に発表する機会も多く設けている。これら本邦研修の経験が、彼らの技術者としての自信になり、農家の信頼の厚い普及員になっている土台になっていることを、今回の視察で確認することができた。



茎径から生育診断し、追肥のタイミングをアドバイスする 2012年帰国研修員アジャヤ氏（左）



圃場調査をする 2010年帰国研修員スディール氏（左2番目）



営農相談に乗る 2010年帰国研修員アルン氏（左2番目）と同2011年のサンデッシュ氏（右2番目）